

B-4 資源節約の立場からみた足ぶみ洗たくの再検討 県立新潟女短大 ○多田千代

目的 近い将来に地球上の資源涸渇が予測される今では、資源を節約して、かつ合理的、快適な生活方法を見出すことは、われわれの重要課題である。被服整理学の立場からこの課題にこたえる目的で本研究に着手した。「足ぶみ洗たく」の歴史は古く、平安時代にも行われていたことが記録に明らかであるが、今では特殊条件の地方を除けば、大部分の日本人がこの洗たく法を捨てた。ところが、これが一般家庭にも取り入れられてより有効な洗たく法であることがすでに30余年前に近藤耕造氏により主張されている。また最近では、その生体負担度が熟練者ほど少く、かつ洗浄効率が高いことが奥窪朝子氏らにより報告された。筆者は、これらの実に着目し、特に、熟練者と未熟練者との間の洗浄効率の差異は、汚れ離脱に必要な布地変形の差異、すなわち布地に対する機械力の加えの差異に起因すると推定した。そこで本報では、まず、足ぶみの仕方を変えてその有効度を追求め、最も有効とみなされた方法と洗たく機洗浄とを、洗浄効率および洗剤、水使用量の立場から比較した。

方法 洗浄の方法は、JEM電気洗たく機洗たく性能試験法に準じ、白布にカーボンブラック人工汚染布の一端を縫いつけて洗たく物とし、浴比、洗たく時間を変えた。すすぎ効率の判定は、すすぎ水中の洗剤量を電気伝導によつて比較した。

結果 熟練者によつて良い条件で洗たくとすすぎが行われた場合、その洗浄効率は足ぶみ \approx 渦巻型洗たく機強反転。同等の洗浄率、すすぎ効率を得るに必要な洗剤、水、電力の使用量は 足ぶみ \ll 洗たく機であった。